



豊後高田の昭和の街並みを歩き、ボランティアガイドによる説明を受ける



治験に参加協力した人々に感謝の気持ちを表そう——。9月3～5日の2泊3日で「創薬ボランティア感謝の集いin別府・湯布院」が実施された。初めての試みとなった感謝旅行は、NPO法人ニューイング、大分大学医学部附属病院長の中野重行氏、湯布院厚生年金病院の企画・協力で実現したもの。初日以外は台風の影響であいにくの空模様となったが、参加者は観光と温泉を満喫しながら、同行したCRCと治験について語り合ったり、転倒予防教室で運動に挑戦。日頃味わえない充実した時間を過ごした。

創薬ボランティアの感謝旅行が実現

初めての試みで
別府・湯布院へ



古い街並みがそのまま残されている

えた3日間



4グループに分かれて行われたワークショップ



創業ボランティアの意義を語る中野重行氏



専門施設だけにリハビリテーションの器具がずらりと並ぶ。写真(左)は院内を説明する湯布院厚生年金病院の有田眞院長



治療に関する様々な思いが伝えられた

初日の夜には、宿泊先の別府市内のホテルで「感謝の集い」が開催された。浴衣姿も見られるリラックスした雰囲気の中、あいさつに立った中野氏は、治療への参加協力が感謝の意を示した上で、「創業ボランティアが参加して初めて薬ができる」と改めて治療の意義を強調した。「薬には必ず副作用がある」とも話し、相互作用等を考えた薬との上手な付き合い方を解説した。

続いて、四つのグループに分かれてワークショップが行われ、現場のCRCと医師も参加した。最後に発表されたまとめでは、「話をじっくり聞いてもらえる医師、CRCがいて良かった」「家族に反対されたが乗り越えて参加した」「プラセボの不安より副作用に納得して参加した」といった声が聞かれ、創業ボランティアとしての積極的な姿勢がうかがえた。興味深いのは、「治療参加によって健康管理に気をつけるようになった」との声が多かったこと。治療に参加する創業ボランティアの、健康に対する強い興味・関心がうかがえた。

こうした声にCRCと医師からは、「自らの意思で参加してくれるボランティアをどう増やしていくかが課題」「貴重な参加者の意思に応える社会を作らないといけない」などの発言があり、患者側からの生の声に改めて気を引き締めていた。

総括として中野氏は、事前に行ったアンケートで「時間をかけて理解できるように説明してほしい」との回答が多かったことに触れ、「皆さんの思いがよく表れている」と指摘。「これからの医療は安心と満足の提供であり、治療も安心と満足をいかに保証していくかが問われる」と方向性を示した。その上で、「豊かな医療はボランティアの協力があって初めて実現する」と改めて創業ボランテ

楽しみながら健康を考



転倒予防教室では、まず棒体操にチャレンジ



栄養士によるカロリー勉強会



ストレッチでは白旗の運動不足を実感した人も。そして難しいバランスも何とかクリア



独自に作成された治療体操のしおり



2日目は、湯布院厚生年金病院の協力のもと、「ヘルシーツアーinゆふいん」が企画された。わが国最大級のリハビリテーション施設である湯布院厚生年金病院内を見学した後、体育館に移動。リハビリ療法士による「いきいき棒体操」や「転倒予防教室」が行われ、参加者はストレッチやバランス運動に悪戦苦闘しながら楽しく体を動かした。さらに昼食メニューを題材に、栄養士による「カロリー勉強会」も行われ、実際に昼食後は全員がカロリー当てクイズにチャレンジ。昼食会場は和やかな雰囲気包まれた。



カロリー当てクイズで好成績を収めた人には景品が贈られた

イアの重要性を強調し、医療者と作る安心できる医療の実現を目指すべきと語った。

初めての試みとなった感謝旅行の参加者たち



ネガティブなイメージ払拭 双方向で治験の認識深める場に



初めて企画された「創薬ボランティア感謝の集い」は、感謝の意を示すにとどまらず、医療者と創薬ボランティアが、お互い治験について考えを深める良いきっかけともなったようだ。

実際、第一相試験を体験し、今回の旅行に参加したボランティアからは、「治験には裏バイト的な

印象を持っていたが、実は科学的なものであることが分かった。この旅行でもCRCの方と接して、こういう方々が治験を支えているのかと、その熱意に心を打たれた」との感想が聞かれた。

一方、同行したCRCからも「今までずっと院内で患者さんと接していたが、全く違う環境で接することができた貴重な機会となり、旅行を楽しむことができた」との声があった。

数年前と比べると、治験の認知度は格段に上がってきた。これまでのネガティブなイメージも少しずつ払拭されつつある。こうした中、今回のような企画を通じて、創薬ボランティアの輪が広がることの意義は大きい。それだけに、医療者側にも、治験に参加しやすい環境作りのさらなる継続的な努力が望まれるところだ。